

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	Jahedzadeh Shorblagh Behnam (ジャヘドザデ ショルブラグ ベヘナム)
論文題目	日本語とペルシア語の構文並列の対照研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、日本語およびペルシア語における構文並列の際に生じる類似要素の省略現象 (ellipsis) を、対照言語学および生成文法の方法に基づき記述し、さらにその理由を解明することを目指した実証および理論的研究であり、全6章から成っている。</p> <p>第1章では、構文並列および省略に関わる用語の定義と説明がなされている。ソシュールが提唱した言語記号の線条性により言語的要素は時間軸上に配列される。言語は時系列的な現象であり、統語レベルにおいては同時に二つの構文を発することは不可能である。さらに構文が並列されることにより前件と後件の間に類似事態が出現し、繰り返すことが不要な要素が省略される。省略は言語における普遍的原則であるが、他方その規則は言語によってそれぞれ個別的であり、動詞の省略に関わるgappingに見られる省略処理プロセスは英語と日本語を比べた場合、前者が後件、後者が前件の動詞を省くという具合に、全く逆転している。本論文では従来先行研究が皆無であった日本語とペルシア語の構文並列方法に関して動詞のみでなく類似事態による名詞句の省略現象をも視野に入れ、その記述と理由の解明を目指している。</p> <p>第2章では、ペルシア語と日本語の統語的構造を含む個別言語的な概説がなされている。ペルシア語はアラビア文字で表記されるが、系統的にはインド・ヨーロッパ語族のインド・イラン語派に属し、イラン、アフガニスタン、タジキスタンの公用語である。本論文で扱うペルシア語はイランにおける標準語としてのテヘラン方言である。ペルシア語は言語類型的に屈折語であり、書き言葉では厳格なSOV語順を示すが、話し言葉では語の配列は比較的自由である。一方、類型的に膠着語に属する日本語は単文、複文、埋め込み文すべてにおいて一貫してSOV語順が保たれ、時制・法などの文法的要素は動詞語幹の後に置かれ、助詞も後置される。</p> <p>第3章では、構文並列に頻繁に現れるペルシア語のhamと日本語の「も」が扱われている。ペルシア語のhamについては先行研究において「累加」、「連結詞」、「強調」、「代名詞」としての用法が指摘されているが、本論文は構文並列に関わる「連結詞」としてのhamの用法をさらに「基本的」、「因果関係」、「補足」、「追加」の4つに細区分し、それぞれの意味的特徴を挙げている。また、日本語の「も」については定延 (1995) と沼田 (2009) などの先行研究を比較検討し、定延の「基本的」、「意外」、「通念」、「色々」、「当たり前」、「確定回避」という6分類を採択して、ペルシア語 hamの4つの用法と比較している。その結果、日本語の「も」とペルシア語のhamは「基本的」な用法において対応するが、それ以外の周辺的な用法では、ペルシア語のhamの場合、直接参照可能な要素が存在しなくてもhamが現れるのに対して日本語の「も」では参照される要素の存在がhamと比べて強く求められるという違いがあることが指摘されている。</p> <p>第4章では、「も」とともに構文並列に用いられる日本語の「て」とそれに対応するペルシア語の並列詞の用法が扱われている。「て」については時枝 (1954) を始めとして多くの先行研究があるが、本論文では遠藤 (1982) に基づき、「付帯状態」、「因果関係」、「継起・順序」、「並列」、「対比」、「手段・方法」、「逆説」、「結果・評価」の8つの用法に分類する。さらに「て」の8つの用法をペルシア語の並列詞と比較した場合、「因果関係」、「継起・順序」、「並列」、「対比」という4つの用法に</p>			

に関して-oおよびøマーカー（並列詞省略）と対応することが明らかとなった。また、上記のhamとは「因果関係」、「並列」においてのみ対応関係が存在する。以上の事から日本語「て」の「付帯状態」の用法はペルシア語の並列詞では表現できず、その逆にペルシア語hamの「補足」、「追加」の用法は日本語の並列詞では表現できないことが分かる。

第5章では、日本語とペルシア語における、動詞の省略に関わるgappingの仕組みが扱われている。gappingは構文が並列された場合に前件あるいは後件のどちらかの動詞が任意的に省略される現象で、上述したように、日本語では前件、英語では後件の動詞が省かれる。ペルシア語におけるgappingに関する先行研究はMarashi (1970)があるが、この中でMarashiはペルシア語では前件の動詞省略（BG）は非文法的ではないが一般的でない、と述べている。これに対し本論文では、構文中の動詞（V）の活用形式と主語（S）の数・性・人称との一致に関するSVA規則および並列される要素とその構文中の一番近い項との一致に関するCCA規則に抵触する場合にはBGが容認されないとして、Marashiの説に関する詳細な論を展開している。また、gappingと語順の関係について、ペルシア語は後件の動詞省略（FG）というgappingを示すので語順に関してSVO言語であるとするMarashiの説、あるいはペルシア語はアラビア語との接触によってSVO化したとするVennemann (1974)に見られるようなSOV・SVO語順説に関して、本論文は、ke節を含む複文、知覚動詞による複文ではSVO語順が一般的であることを指摘して、両語順説に関する詳細な論を展開している。

第6章では、結論として本論文の内容が総括的に扱われ、今後の課題として構文の並列に関わる他の要素および名詞句の並列に関する対照研究の必要性が述べられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、対照言語学および生成文法の観点から、日本語およびペルシア語における構文並列の際に生じる類似要素の省略現象 (ellipsis) を記述し、さらにその理由を解明することを目指した実証的研究である。

本論文の学術的貢献として、言語記号の線条性により言語はその要素が時間軸上に配列される時系列的な現象であり、統語レベルにおいては構文が並列されると前件と後件の間に類似事態が出現し、繰り返すことが不要な要素が省略される。省略は言語における普遍的原則であるが、他方その規則は言語によってそれぞれ個別であるという原則を基に従来先行研究が皆無であった日本語とペルシア語の構文並列方法に関して動詞のみでなく類似事態による名詞句の省略現象をも視野に入れ、その記述と理由の解明を行ったことが挙げられる。

本論文は、まず構文の並列において頻繁に現れるペルシア語のhamと日本語の「も」に関して、先行研究において「累加」、「連結詞」、「強調」、「代名詞」としての用法が指摘されているhamの用法中、構文並列に関わる「連結詞」としての用法をさらに「基本的」、「因果関係」、「補足」、「追加」の4つに細区分し、日本語の「も」の「基本的」、「意外」、「通念」、「色々」、「当たり前」、「確定回避」という用法と対照させ、その結果、ペルシア語のhamと日本語の「も」は「基本的」な用法において対応するが、それ以外の周辺的な用法では、ペルシア語のhamの場合、直接参照可能な要素が存在しなくてもhamが現れるのに対して日本語の「も」では参照される要素の存在がhamと比べて強く求められるという違いの存在を明らかにしたことが注目される。また、日本語の「も」については、文脈における「類似事態」の明確度の差異に「も」の使用度が依存していることをアンケートに基づく統計的な手法によって指摘したことも本論文の大きな貢献である。

また本論文は「も」と同様に構文の並列において頻繁に現れる日本語の「て」とそれに対応するペルシア語の並列詞に関して、「て」の「因果関係」、「継起・順序」、「並列」、「対比」という4つの用法がペルシア語の-oおよびøマーカー（並列詞省略）と対応し、hamとは「因果関係」、「並列」においてのみ対応関係が存在する、またペルシア語hamの「補足」、「追加」の用法は日本語の並列詞では表現できないことを明らかにした点も評価に値する。

さらに本論文のペルシア語におけるgappingの仕組みに関する以下の二点の指摘は構文並列研究に多大な影響を及ぼすことが期待される。まず、ペルシア語は先行研究においては前件の動詞省略 (BG) は非文法的ではないが一般的でないと言われていたが、本論文は、構文中の動詞 (V) の活用形式と主語 (S) の数・性・人称との一致に関するSVA規則および並列される要素とその構文中の一番近い項との一致に関するCCA規則に抵触する場合にはBGが容認されないとして、gappingが生じる条件を詳細に示している。また、ペルシア語の語順について、従来、伝統文法や先行研究ではペルシア語の語順はSOVであるとされてきたが、Marashi (1970) はgappingと語順の関係に基づいて、ペルシア語は後件の動詞省略 (FG) というgappingを示すので語順に関してSVO言語であるとする説を提唱し、また、Vennemann (1974) はペルシア語はアラビア語との接触によってSVO化したとしている。以上のようなSOV・SVO語順説の対立について、本論文は、ペルシア語は基本的にはSOV言語であるが、ke節を含む複文、知覚動詞による複文では語順がSOVから逸脱してSVO化することを指摘して、SOVとSVO両語順が現れる詳しい条件を提示している。

本論文は例文の詳細な記述に基づく実証的研究としての貢献に加え、gappingの仕

組みと語順の関係の解明という理論的側面においても高く評価される。本論文は実証的な言語研究が精緻な分析を通じて理論的な分野においても寄与することが可能であることを示している。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年1月14日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日：平成26年4月1日以降